

## 函館山緑地におけるシラホシムグラの分布と在来近縁種への影響

北斗市 長谷 昭

はじめに

シラホシムグラ *Galium aparine* L. は、アカネ科ヤエムグラ属でヨーロッパ原産の外来植物である。在来のヤエムグラ *Galium spurium* L. var. *echinospermon* (Wallr.) Desp. と酷似した形態とニッチを有するために混同され、2004年以降になって広く認識されるようになった種(植村ほか2015)であり、北海道における外来生物(国内外来を含む)をランクづけして網羅した「北海道ブルーリスト2010」(北海道2010)にも記載されていない。道内ではほとんど知られないまま、函館市内及びその近郊と室蘭市から伊達市にかけての胆振地方西部を中心に繁茂していることが、本誌で報告されている(五十嵐2016、酒井2016)。

その繁殖力はすさまじく、筆者の観察によると、函館市内及び近郊では、ニッチが競合する近縁の在来種を駆逐するのではないかと思われる勢いで繁殖しており、実際に多くの都市緑地で、ごく普通に生育しているはずのヤエムグラを確認することが困難になっている。また酒井(2016)によると、シラホシムグラは函館山山麓のみならず、環境省から「函館山自然林」として特定植物群落に選定されている函館山緑地(以下、都市計画法に規定する都市計画緑地部分をこのように称する。その周辺も含むと思われる場合は「函館山」とする)にも侵入しており、在来植物への影響が危惧された。

そこで、本稿では、函館山緑地のすべて

の通行可能な散策コース(遊歩道等)におけるシラホシムグラの分布状況を報告するとともに、近縁の在来種でありニッチが競合するヤエムグラとオオバノヤエムグラ *Galium pseudoasprellum* Makino(以下、シラホシムグラと合わせてヤエムグラ類と総称)の分布調査結果をもとに、シラホシムグラの在来2種への影響を検討した。

シラホシムグラは、在来2種への直接的影響を評価することはできなかったものの、登山者・散策者が多い主要な散策コース沿いに侵入し、一部では繁茂しており、函館山緑地における自然植生の保護のためにも、シラホシムグラの繁殖を適切に管理することが必要であることが示唆された。

調査地、調査期間及び調査方法

調査地は、函館山緑地内を縦横に走る通行可能な散策コース(遊歩道等)沿いを中心とし、林内や通行禁止の山道は対象としなかった。主たる調査は2020年5月上旬から9月上旬まで不定期に行った。

函館山緑地は採集禁止なので、それぞれの種の特徴と生育地がわかるように位置情報付きで写真撮影し、写真をもとに図鑑類を参照して種の同定を行った。また、2010年から2019年にかけて各コース沿いで撮影した植物写真を再点検し、結果に追加した。通行可能なほぼ全散策コース(車両が通行する登山道を含む)が調査対象に含まれているが、コースの総延長は15km以上になるの